6章　長崎市深堀地区の歴史的環境の保存と活用
—武家屋敷跡と石塀のある町並—

岡林　隆敏、北村　潤一、串山智恵美、村山　真一

1節　長崎市深堀地区について

深堀地区は長崎市の南端に位置し、西彼杵郡三和町と接している。1885（明治18）年7月町村制行政区画を改正、深堀・大籠・香焼の三大字をもって深堀村を組織した。町村合併促進法の対象となり、1955（昭和30）年1月1日に長崎市に編入した。1968（昭和43）年には深堀・香焼間が埋め立てられ、埋め立て地に三菱重工が進出した。この頃、山手には新しい住宅団地ができ、新旧の住民が住む地域になっている。この深堀地区には、長崎市で唯一の武家屋敷跡と石塀が残されており、独特の歴史的環境を保っている。

近年、深堀地区に「まちづくり推進協議会」が結成され、歴史を活かしたまちづくりが行われている。著者らは、深堀地区の長崎市における歴史的環境の重要さに着目し、10年前からこの地域に注目してきた。長崎大学工学部社会開発工学科土木情報システム研究室では深堀地区のまちづくり事業を支援すると共に、この地区の特徴である武家屋敷跡と石塀の調査を行ってきた。ここでは、深堀地区の歴史的環境の保存の取り組みと、今後の活用について述べる。

古くには、深堀を中心にして、戸町から以南、野母および散在する島を含めて戸八の浦と呼ばれていた。1225（建長7）年、平氏の末裔、三浦能伸が筑前甘木および肥前戸八の地頭に任じられ関東より赴任してきた。父の仲光が戸八の浦に住み、前領地上総国深堀（今の千葉県夷隅郡大原町）より、ここを深堀と地名を改めた。17代真法のとき諫早の西郷家から純賢を養子に迎え、鍋島と改姓した。以来、佐賀鍋島家家臣となり、その後12代にわたって佐賀家老職を勤めた。

このような地域であるために、深堀地区は長崎市で唯一の武家屋敷跡と石塀

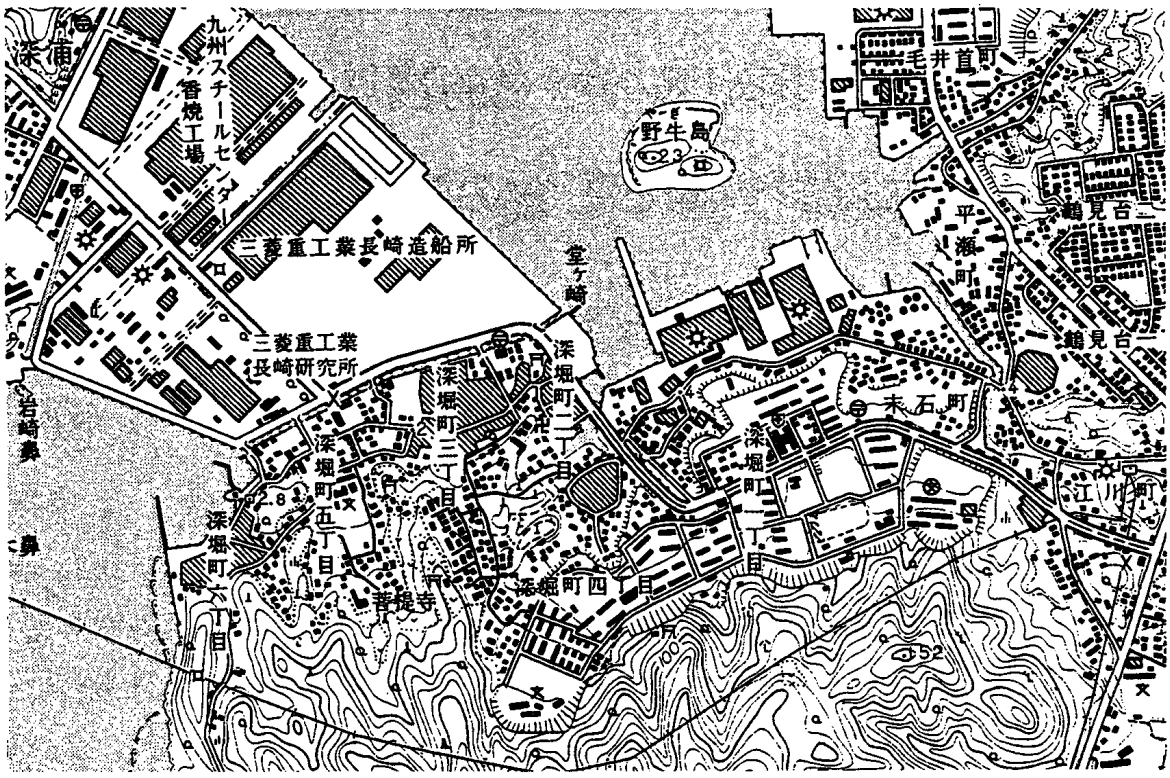

図1　深堀地区の位置（国土地理院　1:25,000　長崎南西部）

など様々な江戸時代の歴史的景観が保存されたところとなった。武家屋敷跡や石塀は多く残されていたが、近年、住民が移転するに伴い、跡地がアパートや駐車場になり、深堀らしい風情が次第に壊されるようになってきた。現在、石塀が残されているところは、30箇所となっている。

2節　深堀地区の歴史的環境

現在の長崎市の中核部分は、江戸時代には天領であったために、城下町が形成されなかった。深堀地区は、前述のように江戸時代を通して佐賀藩の家老の所領であったために、色濃く江戸時代の歴史的景観を残している。特異な都市形成の歴史を持つ長崎市にとっては、深堀は市内では唯一、武家屋敷跡がある地区となっている。

日本の町並みの多くが破壊された昭和40年代の高度成長期に、三菱重工が進出してきたが、西岸の香焼島との間を埋め立て工場を建設したために、深堀地区の武家屋敷跡は残された。さらに、新興住宅地が建設されたが、旧市街とは

別の場所に建設されたために、この点からも旧市街地が残された。近年、住民の地区外への移転に伴い、武家屋敷跡の駐車場やアパート化が進み、さらに石塀の破壊も進行した。しかし、地元自治会が深堀の歴史を活かしたまちづくりに着目し、武家屋敷跡と石塀の保存運動に立ち上がっている。

深堀地区は城山の自然、自然が残された海岸線に囲まれ、長崎市の中でも自然の豊かな所である。その狭い範囲に多くの文化財が指定されている。円成寺の梵鐘（長崎市指定文化財）、深堀鍋島家墓地（長崎市指定史跡）、五官の墓（長崎市指定史跡）、深堀神社の鳥居（長崎市指定文化財）、深堀陣屋跡のアコウ（長崎市指定天然記念物）などがある。

また、深堀地区の中心部が武家屋敷跡から形成されており、豊富な石塀が残されている。

東屋敷跡：通称お東と呼び第三家老樋口氏の屋敷跡で、門及び石塀はほとんどその当時の面影を残している。

中屋敷跡：通称中屋敷と呼び筆頭家老深堀猪之助の屋敷跡。

西屋敷跡：通称お西と呼び、第二家老田代喜左衛門の屋敷跡。

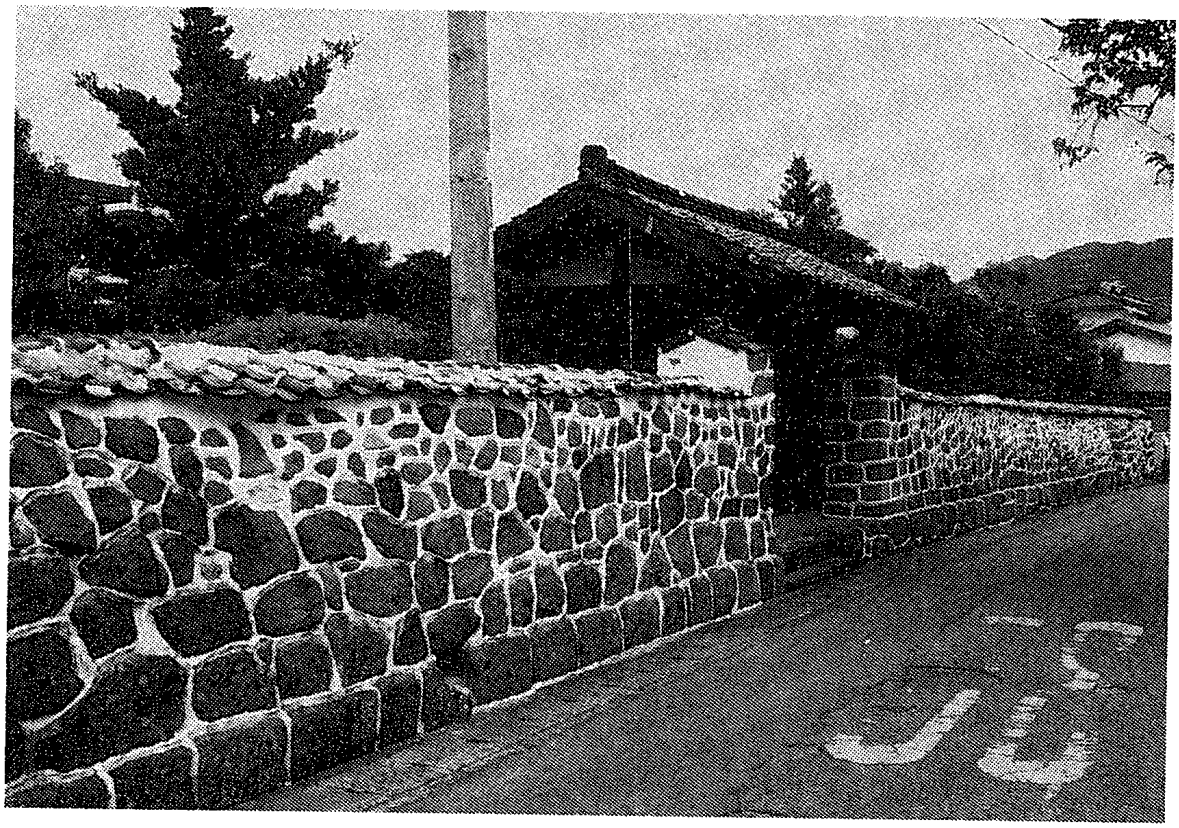

図2　深堀地区の町並み

御屋敷跡：深堀陣屋、通称はお屋敷、深堀藩主の居城である。

御船内：旧藩時代の船着き場。

御船手：佐賀藩海軍施設があったところ。

円成寺：浄土真宗の寺で梵鐘は長崎市の文化財に指定されており、周囲が五色塀で囲まれている。

菩提寺：天正年中に禅宗となる。藩主の墓、十人義士の墓等がある。墓地。

藩主の墓：江戸時代に佐賀藩の家老職を勤めた深堀鍋島家（6000石）歴代の墓地には、19代（鍋島家２代）茂賢以後の領主とその夫人や一族など41の墓がある。

十人義士の墓：長崎の町年寄高木彦右衛門と深堀藩士の紛争により、切腹させられた藩士の墓である。

深堀神社と鳥居：1837（天保８）年深堀地区では農作物が大いに実ったので、このとき建てた鳥居である。

波止恵比寿：佐賀領内にだけ祭られ、漁業と商業の神とされている。

３節　深堀地区のまちづくり

（１）　まちづくり推進協議会の活動

深堀地区では、住民が武家屋敷や石塀を次の世代に残し、住み易いまちづくりをするために活動を行ってきたが、1996（平成８）年１月９日より、「深堀地区まちづくり推進協議会」を結成して活動を始めた。協議会の規約によれば、次のような活動目標を掲げている。

「この会は、縄文時代から人々が住み続けてきた深堀地区の歴史的な文化遺産を整備保存するとともに、新旧調和した素朴で潤いのあるまちにするために、若い層にも幅広く働きかけて、地域住民と一体になったまちづくりの推進を目的とします」

1996（平成８）年度から1998（平成10）年度にかけての、まちづくり推進協議会の活動をまとめると次のようになる。多彩な活動を活発に行っているが、紙面の都合上、主だったものを書き出した。

1）　1996（平成８）年12月６日、深堀地区まちづくり推進協議会（会長：小西

満男）は、景観まちづくり地域団体として長崎市より認定される。

2）1997（平成９）年２月、深堀の石塀群が、「歴史のある部門」97長崎市都市景観賞受賞。

3）1997（平成９）年３月20日、深堀地区まちづくり１周年記念事業。

4）1998（平成10）年３月11日、蒸気船の模型完成。

5）1998（平成10）年３月30日、98長崎市景観賞「歴史のある部門」で深堀の石塀群が受賞、深堀地区の連合自治会が表彰された。

6）1998（平成10）年３月31日、深堀史跡パンフレット１万部印刷、各家庭に配布。

7）1998（平成10）年11月７日、深堀地区まちづくり２周年記念事業、景観賞碑と深堀神社の文化財説明板除幕式、記念講演会、まちなみ写真・古写真展と昔の生活用具展。

（２）　長崎大学の支援

筆者の一人は、数年前から深堀の武家屋敷跡や石塀また豊富な樹木、さらに周囲の豊かな自然に着目し、この歴史的環境を保存・活用する必要性を考えてきた。そこで、長崎市が主催するまちづくり支援プログラムである「長崎伝習所」の1988（昭和63）年度に、長崎都市探検塾（塾長：吉岡宣孝）を申請し、その中で、深堀地区の歴史的環境の調査を行い、「深堀城下町探検レポート」として報告書を作成した。報告の概要は、次のようなものである。

1. 深堀城下町について、

●深堀城下町の歴史、●深堀地区の歴史の語るもの

2. 深堀散策の魅力とルートマップ

3. 深堀城下町で見たもの、出会ったもの

●町並と建物、●歴史を語る街中の点景、●町中で出合ったもの

4. おわりに

深堀城下町の魅力。①どこを通っても真直ではない身近な町並み。②寺社の境内から一望できるヒューマンスケールの古い町並み。③だけど何度訪れても、なかなか道が覚えられない楽しさ。④迷路のような思いがけない発見と生活の匂い。⑤とても大切にされている古い樹木たち。⑥いろんな形や種類の石で組み合わされた石塀。⑦人々の暖かさと親切さ。

その後、「深堀地区のまちづくり推進協議会」が発足し、著者の１人が記念講演会に招待され、深堀地区のまちづくりの提案を行った。

1)　1997（平成９）年３月20日、深堀地区まちづくり１周年記念事業

「歴史的景観とまちづくり」の講演をし、1988（昭和63）年に撮影したスライドと10年後の1997（平成９）年のスライドから、町の変遷を見た。また、地区外の市民から見た深堀の魅力を紹介した。

2)　1997（平成９）年７月２日、深堀地区公民館講座

「深堀の歴史を生かしたまちづくり」の講演を行い、歴史的環境を活かしたまちづくりの提案をした。

3)　1998（平成10）年７月27日、深堀地区の石塀の調査

深堀地区まちづくり推進協議会の活動が活発になり、これを支援するために、現在残されている石塀の調査を行った。石塀を地元と長崎市都市景観課が管理できるように、石塀の管理台帳を作成、さらにこれをＣＤ―ＲＯＭ化した。

4)　1998（平成10）年11月７日、深堀地区まちづくり２周年事業

「歴史的遺産―深堀地区の石塀―」と題して、深堀地区の石塀の現状と貴重さを調査結果を踏まえて紹介した。研究室の学生が中心になって作成した、「深堀地区石塀管理台帳」を地元まちづくり推進協議会に贈呈した。

このように長崎大学工学部社会開発工学科土木情報システム研究室では、深堀地区のまちづくり推進協議会に対して、歴史的環境の調査と保存・活用のための理論的・技術的支援を行ってきた。

４節　深堀地区石塀調査

深堀地区石塀調査は、1998（平成10）年７月27日に長崎大学工学部社会開発工学科土木情報システム研究室が行った。調査対象となったのは、深堀地区に現存する石塀で、歴史的に貴重なものであり、かつ深堀地区の歴史的景観形成に重要な役割を果たしているものである。対象となった石塀の場所は30箇所となった。調査一覧表を表１に、調査位置図の一部を図３に示す。現在、貴重な石塀に関してきちんと整理した形で残っている資料はない。そこで、本調査で

表1　調査一覧表

	住　　所	所 有 者		住　　所	所 有 者
1	深堀町2丁目74	森　興正	16	深堀町5丁目165	深堀神社
2	深堀町2丁目86	高比良	17	深堀町5丁目177	浦川　有作
3	深堀町2丁目92	佐藤	18	深堀町5丁目164	高森　信雄
4	深堀町2丁目96	志波原	19	深堀町5丁目150	田端　長生
5	深堀町3丁目120	浦葉　俊昭	20	深堀町5丁目159	楳崎
6	深堀町3丁目68	円成寺	21	深堀町5丁目14	深堀
7	深堀町3丁目210	山口	22	深堀町5丁目9	山下　兼彦
8	深堀町3丁目216	山口ケイジ	23	深堀町5丁目218	田代　眞也
9	深堀町3丁目117	大山アパート	24	深堀町5丁目245	(有)セブンタクシー
10	深堀町5丁目191	樋口　賢一	25	深堀町5丁目238	大塚　和寿
11	深堀町5丁目194	三好	26	深堀町5丁目281	森　節男
12	深堀町5丁目204	米田　新成(善提寺)	27	深堀町5丁目266	森　次郎
13	深堀町5丁目213	植木　万次郎	28	深堀町2丁目28	波戸
14	深堀町5丁目211	山崎　嘉明	29	深堀町2丁目	畑地　末広
15	深堀町5丁目165	市教委(深堀貝塚資料)	30	深堀町2丁目	立石

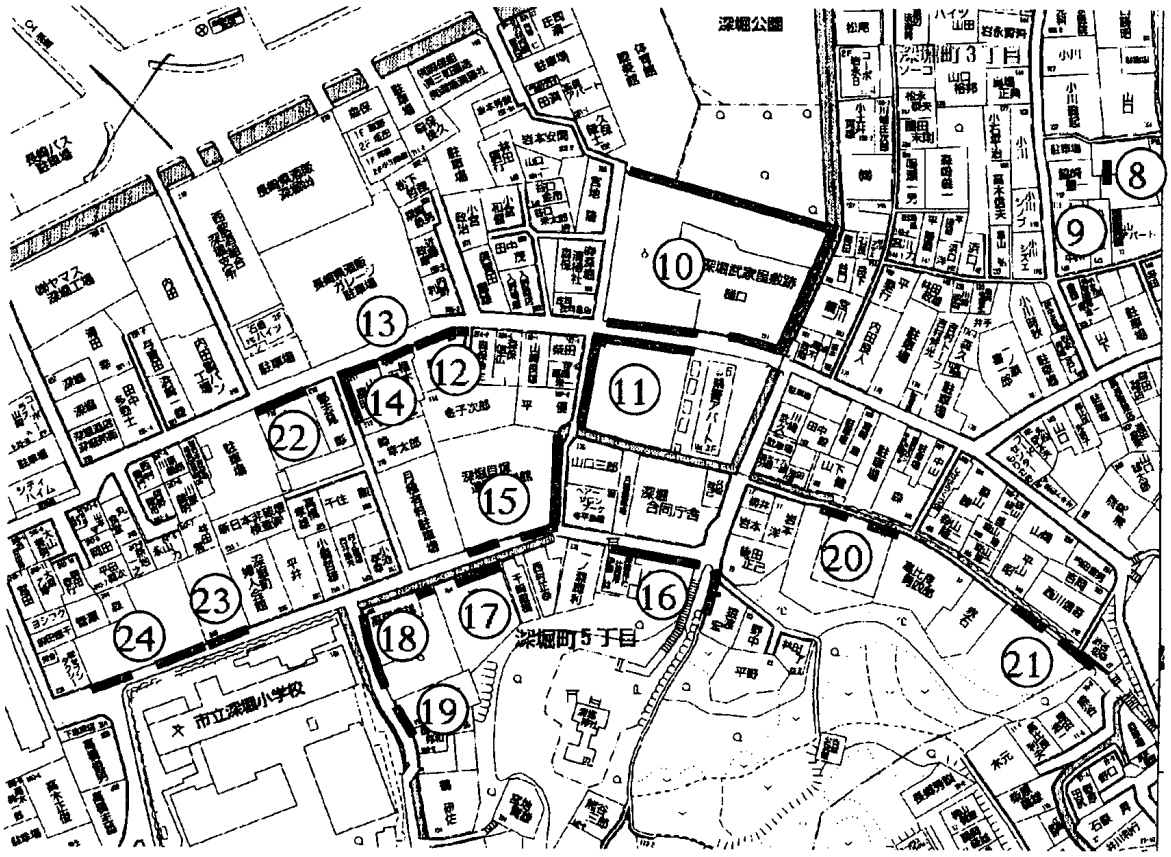

図3　調査位置図の一部

は、現存する石塀の現状把握を目的とした。具体的な調査内容は、石塀の規模を把握するために全長・高さ・幅を計測し、スケッチした図面に計測値を記入した。また、石塀の全体および詳細の写真撮影を行った。コの字など複数面を持つ石塀がある場合は、各面に対して個別に調査を行った。全体として調査対象の石塀面の数は55となった。

次に各調査項目の詳細について説明する。

1) 計測：巻き尺で石塀の全長・高さ・幅を計測する。石塀の中には、門や駐車場のために、間が空いていたり、石塀の上に樹木がある箇所もあるので、その計測も行った。

2) スケッチ：石塀の上にある樹木等も含めて石塀の形態を簡易的に正面からと側面からスケッチし、計測値を記入した。

3) 写真撮影：デジタルカメラで各石塀を区別できる程度でサムネール写真を撮影した。また、デジタルカメラとは別に、一眼レフカメラで全体と詳細の写真撮影を行った。全体写真では概観が把握できるようにした。詳細写真では石塀の材質や組み方が把握できるようにした。

5節　深堀地区石塀管理台帳とＣＤ―ＲＯＭ化

（1）　「深堀地区石塀管理台帳」の作成

調査した石塀は歴史的に大変貴重なものが多く、今後も保存して維持管理することが望まれる。維持管理する際に、物件のデータを整理し、補修工事などの管理記録を残していかなければならない。そこで、今回の調査をもとに、「深堀地区石塀管理台帳」を作成した。管理台帳は、「住所・所有者一覧表」・「石塀所在地図」・「深堀地区石塀群調査カード」から構成されている。一覧表は石塀の整理番号・住所・所有者を記載した。所在地図は、深堀地区の地図上に石塀の場所とその整理番号を記載した。調査カードは各石塀つき１枚のシートを作成し、表には詳細情報を、裏には写真を掲載して調査データをまとめた。詳細情報としては、整理番号・住所・所有者・サムネール写真・敷地内における石塀の位置・計測ポイント・寸法・材質・備考を記載した。写真情報

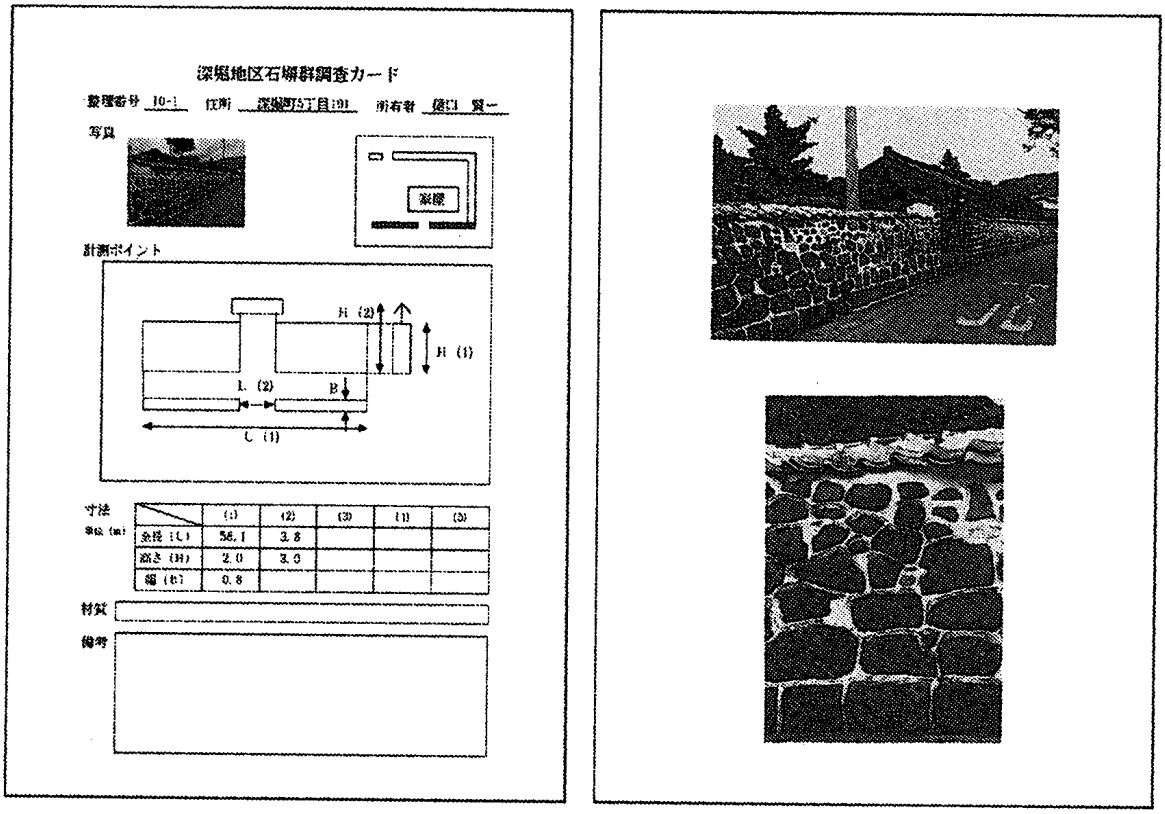

図4　深堀地区石塀群調査カード

としては概観が把握できる全体写真と石塀の材質や組み方が分かる詳細写真を掲載した。作成した管理台帳の調査カードの例を図4に示す。また、本管理台帳が有効活用されるように地元と長崎市都市景観課にそれぞれ寄贈した。

（2）　「深堀地区石塀管理台帳」のデジタル化とその保存

「深堀地区石塀管理台帳」は破損や劣化といった恐れがあり、また複製するには時間と費用が掛かるといった不都合な点もある。そこで、「深堀地区石塀管理台帳」をデジタル化してCD―ROMに収録し、これらの問題点を改善して利用価値の向上を試みた。デジタル化には、大変使い勝手が良く、広く普及しているPDF形式を採用した。調査カードの表は、Acrobat Distiller 3.0J（Adobe社製）を使用してPDF化を行った。そのため、読みづらい文字や図面を拡大してもきれいに表示できる。裏はイメージスキャナを使用して解像度144dpiで収録した。こうして写真データは200％で拡大してもきれいに表示される。また、単にデジタル化するだけではなく、一覧表や所在地図あるいはPDFの機能であるしおりからの検索機能を設けて管理台帳の利便を図った。この編集にはAcrobat Exchange 3.0J（Adobe社製）を使用した。図5

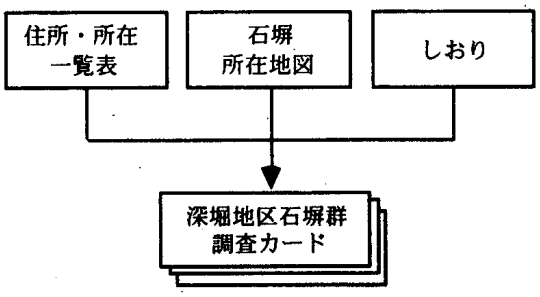

図5　構成図

図6　「深堀地区石塀管理台帳」
CD—ROM

にその構成を示す。一覧表からは表中の所在地や住所にハイパーリンクを設けて各地点の調査カードを閲覧できるようにした。所在地図からは地図上の整理番号にハイパーリンクを設けて地図情報による視覚的な検索を可能とした。しおりからは画面左に表示される整理番号で各石塀の調査カードを表示するようにした。それぞれ検索方法で調査カードの表が表示され、裏は次のページへ進み表示するようにした。このような検索機能を設けたことで容易に調査カードを検索して閲覧できるようになった。そして、デジタル化したデータを1枚のCD—ROMに収録し、容易に持ち運び広く閲覧できるようにした。図6に「深堀地区石塀管理台帳」CD—ROMのジャケットを示す。こうして、「深堀地区石塀管理台帳」の利用範囲が拡大され利用価値が高まったと考えられる。

6節　歴史的環境の保存と活用

従来のまちづくり運動は、地域の活性化を目的にするものであり、その結果、地元の商業活動を活発にすることがその底流にあった。深堀地区のまちづくり運動の特徴は、地元住民が生活のアメニティーを考え、広い年齢層を巻き込んで活動しているところにある。高齢化社会を迎え、またバブル期の狂乱した経済活動が期待されない現在、歴史的環境を保存して、地域のアメニティーを高め、若い世代が住みたくなる地域づくりを目指す必要がある。

最後に、深堀地区の特性を活かした活動をするための提案を示した。

1)　深堀の歴史的景観と石塀

①　石塀・庭・樹木・道路の幅・側溝・屋敷の区画割りが深堀の歴史的景観を構成している。特に、深堀らしくしているものが石塀である。②石塀は長崎市の歴史的遺産である。③石塀を今後長く保存するための対策を考えること。

2)　まだまだある深堀の財産

①　石の基礎・石垣・古い樹木・海岸線の痕跡・港の痕跡・浜恵比寿など深堀地区の歴史を示すものが多くある。②石塀の次に調査するもの。石垣・屋敷の基礎石。

3)　深堀の歴史を調べよう

①　深堀の町の形成。②江戸時代の町割りと現在の敷地の変遷。③江戸時代の道路と現在の道路。④時代による海岸線の変化。⑤港の復元。⑥明治・大正・昭和の深堀の復元。

資料：文書・新聞・ポスター・チラシ・役所からの手紙

写真：絵はがき・集合写真・風景の写真・戦争の写真

参考文献

1)　中尾正美：郷土史「深堀」、1987年1月

2)　下瀬隆治：長崎史情散歩、長崎ユネスコ協会、1986年12月

3)　長崎市教育委員会：長崎市の文化財第9版、1998年3月

4)　長崎市商工課：昭和63年度長崎伝習所研究成果報告書、長崎都市探検塾・深堀城下町探検レポート、ｐｐ．131―136、1989年3月